

災害ボランティアネットワーク通信

2016年版
《前編》

NPO法人

災害ボランティアネットワーク

茨城県石岡市水浜三〇 元

Tel 0280-91-3090

Fax 0280-23-2281

<http://saigaivolunteer.net/>

2011年3月11日、大多数の犠牲者と甚大な被害をもたらした東日本大震災から、五年という年月が流れました。

私たちは毎年その日が来ると、御縁の深い水浜地区（宮城県石巻市）の方とともに、その日を過しています。

今回は、「三反走 さんだほしり 仮設集会場」での追悼法要後に開かれた座談会でのお話を紹介します。

さん 奈性

今年で5回目になりましたが、

1回目から今回まで毎年同じ気持ちで過させてもらっています。

今日から5年目の第一歩が始まります。生活は今まで通りどの方も変わりないと思います。ですが、内情は分かりません。苦しい人、ある程度お金がある人、それぞれに悩み苦しみがあるのだと思います。家族を亡くした方は、どんな時でも悲しい思いがなくならないだろうと思います。

震災当時は食べるものもありませんでした。NPOの皆さんが全国からお米を手配してくれ

たのでみんなと分け合うことでなんとかなりました。そのほかにも全国からたくさんの方の支援をいただきました。



2011年5月12日、雄勝水浜地区で、最初の炊き出しをした時の写真。

さん 奈性

今日のために遠くからありがとうございます。この三反走

さんだほしりで法要をすることは初めてです。

私たち水浜の人間がここに来て5年経ちますが、もう間もなく水浜の復興住宅 へ引っ越すことになりました。

当時水浜の仮設住宅から新たにここへ移るといって不安も多かったのですが、生活する中で元々ここにいらつしやる皆さんに良くいただき、ここでの生活が財産になりました。水浜に戻ることが、半分うれいものと半分行きたくないというのが正直な気持ちです。

これまでテーマを中心提供していただいて、本当に心が落ち着く、和む思いをできました。和むという字に口が付いていますが、口にもものを入れるということは、心が病んでいる人にとって何よりの癒しだと実感しています。

毎月欠かさず来ていただいたことが本当にすばらしいことだと思いますし、そのことは皆さん一人一人に間違いなく伝わっていると思っています。

二〇一六年三月十一日 三反走仮設 法要 座談会

この五年間を振り返って

今思うこと 前編



2016年3月11日の法要にて、焼香し、静かに合掌する

ごん 奈性)

津波が来た時、自分は家にいませんでした。水浜は全滅だと聞いていましたが、うちは2階建てだったので2階は無事かなと思つて帰ってみると何もありませんでした。本当に驚きました。

子どもが横浜と仙台いましたが、なかなか電話が通じませんでした。避難所も食べるものはおにぎり一つの時やバナナだけの時もありました。1週間くらいすると横浜にいる子どもと連絡がついたのでしばらくそっ

ちに身を寄せていました。ですからこちらの状況は全く分かりませんでした。横浜でお世話になっていた病院からは仙台の病院を紹介してもらいました。

その後、仙台の子どものところにいましたが、それでも親戚はどうしているのか、だれか亡くなった人はいるのかなど、状況は分かりませんでした。そこで役場に行つて話を聞くなかで仮設住宅を紹介してもらいそこに移り、その後こちらの三反走に移ってきました。ここの方々は本当にいい人たちばかりで皆さんにいろいろ声をかけていただいて支えてもらいました。

これからは水浜に帰るということも考えていますが、病院に通わなくてはいけなかったり、子どもたちも心配してくれていますので悩んでいます。

震災があつてから5カ所も転々としています。5年前と比べると体も衰えました。皆さんにお世話をかけるばかりです。その中に自分の居場所を考えていかなといけないなど思っている

ところです。

震災前までは全国各地で起こった災害の状況をテレビで観て大変だなど思つていただけでしたが、いざ自分も同じような状況になると被災した方々の苦しみが身に染みて分かってきました。



2016年3月11日の座談会にて、思うところを語る、水浜の皆様

ごん 奈性)

今日で震災から5年目ですが、この震災で失ったものは大きいのですが、この震災がなければ皆さんに出会うこともありませんでした。

私はずっと仙台で一人暮らしをしていましたが、実家が被災してしまいました。仙台では近所付き合ひとかはなかったのですが、水浜に帰つてお母さんたちと避難所でやらなくてはいけないことがあつたのですが、最初はコミュニケーションをとるのが自分としては大変でした。

長いこと親と離れて暮らしていたので、親と一緒の生活というものが慣れるのが大変でした。

ですが、皆さんに良くしていただいてここまで来ることができました。この縁をいつまでも大切にしていきたいと思います。

* * *

被災した現場で、必死に生き続けてきた5年間。そのお一人お一人の思いがひしひしと伝わってくるお話しでした。

座談の内容は、『窓』に続きます。

福島県の汚染とその現実 前編)

～南相馬市 原町別院にて～

2015年7月28日 我々は福島県南相馬市の原町別院を訪れた。以下は木ノ下秀俊氏

真宗大谷派(僧侶) から、そのときにお聞きした話をまとめたものである。

印象操作によって

線量が低いと錯覚させる

まず木ノ下さんは、NPO法人「チーム・本松」が原町別院の境内を除染する前である2011年の10月か11月に、境内から採った放射能で汚染された

木イロン袋に詰められた砂を前にお話された。

以下、木ノ下談

これは134セシウムの半減期を過ぎています。ただ怖いのは、これが大量に一面にあるから線量計に反応しますが、手を離してしまうと、もう反応

ないことです。これが足元にあってもおそろく国や行政の測り方だと「ここは大丈夫です」という話になります。

何マイクロベルト」というのは1mの高さで測つてどの位かというものですけれども、これが足元にあつても結局線量計では拾えない。だから京大の小出裕章さんは、何マイクロベルトではなくて、1平方メートルあたり何ベクレルか」といふ方をされるのです。kgでも怪しいのです。しかし日本はたいたい

kgあたり」ですよ。土壤は、でも世界標準は土壤の汚染を言う時には「1平方メートルあたり」です。ロシアでもね。kgあたりを平方メートルに直す時は、大体65をかける。そうすると、ものすごい数字になる。食品の場合と違って土壤の場合は平方メートルですから、ロシアと比較すると65分の1の数字になっているの

です。だから65倍しないと本当は比較できないのですけれど、その辺はもう印象操作ですね。



南相馬市原町別院の外観 (親鸞web)

曇霧とそれがちな

線量の高い所

線量の高い所というのは、環境にいっぱいあります。ここは線量低いなあ」と思つていても探せばいくらかでもこういうものが見つかる。

空間線量を測るだけではだめで土壤とか表面の汚染を測らなといけない。たくさんあつた時には、空間線量で把握できたのですよ。ところが今は、何年かの間

に雨とか風とか気象状況によつて流れて行つて何処かにかたまつています。線量が下がつたといふことは、半減期が来たといふこともあります。どこかに集まつている場合もある。だから線量が高い所が見つかるのは当たり前です。寄り集まつているので、僕らだともう経験的にこの辺りが高いのではないかといふのは分かります。駐車場なんかで微妙に傾斜してくぼんでいる。水が溜まりそうな所を測れば、東京都内でも線量が非常に高いところがあるかもしれない。

仙台市は線量で言つと0.03から0.05。これが原発の近くにくると0.98になります。これは6国 国境(6号線)ですね。6国はおそろく車の外で20から30マイクロ位でしょうか。でもこれは下がっています。当初除染しましたから。除染する前は車の中で30マイクロですから。ただ高い所というのは延々高いわけではなくて、ほんの一部です。車で走つてせいぜい10分程

度でしょう。ただその6号線をオリンピックで聖火リレーが走るとい話があつてやめた方がいいのではないかなと僕は思っているのですが、どうなることやら。

儼然とした

みせかけるための「まかし」

県知事と森元総理は福島が原発事故から復興していますよということの世界に発信するままたない機会だと思つたわけでしょう。この30マイクログのところを走るとい話を平気で考えています。

いま国は「1時間あたり38マイクログシーベルト年間20ミリシーベルトまでは安全です」というキャンペーンを打っています。これは素ランテニアに来ている人たちに環境省が出しているものですが、「1ミリ以上の被曝はしないでください」と書いてあります。でも福島の人には

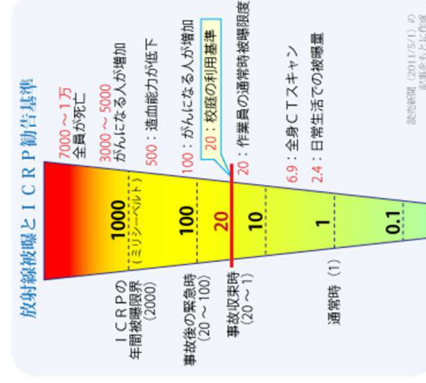
20まで大丈夫だ」と完全にダブルスタンダードです。年間



20ミリというのば エッジス線の胸部レントゲンで言つと400回分です。400回、年間胸部レントゲンを受けても健康に影響はありません」ということを言っているようなものでいくらなんでもそれは無理ではないかと。

その新聞記事は「昨年のものですけれども年間20ミリシーベルト以下は健康に影響なし」という話になつています。これは原子力安全保安委員会が出したのかな。国はそれを受けて色んな施策を進めていますが、法律的な根拠は何もありません。県はこれに依つていま復興事業をしているので、浪江町とか大熊町とかの方々はもう帰れるから帰りなさい」といことで解除になつたん

です。年間20ミリシーベルトです。1時間あたり3.8マイクログシーベルトを下回ればいい。庭先だけちよつと除染をして2マイクログくらいにしてしまえば、もう帰れますというわけです。帰らないのは個人の自由ですが賠償しません」というのが国のあり方ですね。だからちよつと怖いですよ。



いま原発で働いている人や除染作業をしている人達の年間の上限が20ミリです。5年間で100ミリですね。極端な場合は年間50ミリの2年間で100ミリというのが作業員の上限になつています。それを今、一般の民間人も当てはめようとしているわけです。ですから、もしもそれでい

いのなら原発で収束作業にあたっている人は基本、年間20ミリなのですから、別にあんな防護服を着る必要もないし、マスクをしている必要もない。ましてや30分程視察に来る大臣やお役人たちも普通の格好で来てもらつていいはずですけども、非常に厳重な格好で来て帰つていきます。その彼らが言うのは

年間20までは大丈夫なので住民の方は帰ってきて下さい」と。

聖火リレーが成立するためには、オリンピック選手が走ればいいというだけではなく、地元住民が小旗を振つて応援することが必要です。でも実際の数字では無理でしょう。もし本当に表情を訴えるのであれば、原発の作業員たちに沿道に出てきてもらつて、白いタイベツクの防護服を着たまま旗を振つてもらふというのが一番いいのではないかと思いますね。

後編に続く

本文編集 平野喜之氏

テープ起こし 川崎なつみ氏

NPO法人 災害ボランティアネット 収支報告書

(期間：平成27年4月1日～平成28年3月31日)

前年度繰越金	¥1,258,464	
収入総額 (茨城県常総市水害義援金を含む)	¥7,285,667	
支出総額	¥3,399,026	
差引残高	¥5,145,105	次年度へ繰越

平成28年現在収支(4月～8月)

前年度繰越金	¥5,145,105
収入総額	¥793,644
支出総額 (熊本地震支援活動費を含む)	¥2,837,849
差引残高	¥3,100,900

正会員・賛助会員・寄付者 (敬称略・順不同)

(期間：平成27年4月1日～平成28年3月31日)

小島 森一、江森 光子、聖徳寺、岡安 則子、溝上 国喜、山中 えりか、東弘寺、吉田 幸代、正恩寺、邨上 真生、小林 尚樹、妙安寺(みむら)、笠井 英信、西岸寺、富山教区・災害復興支援ネットワーク、大里 幸三、宗念寺、浄真寺、桑原公認会計士事務所、飯貝 宗淳、増田 宣夫、白石 政次、乗願寺、唯信寺、西念寺、大聖寺、加藤 誠、笹本 伸一、永藤 松男、峯崎 賢亮、乗満寺、正覚寺、専行寺、樋崎 菜々、智願寺、円鏡寺、松野 祐、正應寺、玉川 喜美江、光照寺、利正寺、Mio 鍼灸整骨院、横田 洋、正蔵寺、梁河 文昌、孤野 やよい、飯田 千恵子、井上 知子、大塚 展彦、Studio-Pop hair、専勝寺、成満寺、了因寺、正行寺、光明寺、山田 和江、勝願寺、青樹 潤哉、岩城 芳文、伊藤 賢、日系3世ボーリング大会、斉藤 操、澤田 恵子、諦聴寺、柿沼 正男、秦 秀人、服部 吉高、伊藤 麻子、山中 まつ、橋本 はる子、佑浩寺、宗善寺、渡辺 久美子、本多 雅人、石川 真樹、多賀田 晴美、宗念寺、羽部 秀子、明覚寺、光了寺、渡辺 ウメ子、山中 とし子、中村 由美子、宮武 真人、浄教寺、桑島 かおり、高德寺、(財)全日本仏教会、小島 真知子、伊藤 洋之助、東京四組、池崎 方子、明信寺、今泉 温資、宮本 栄子、東京教区、今泉 徳夫、明福寺、小島 貴弘

【平成28年4月～8月現在の寄付者】

藤浪 遊、安藤 恵子、妙安寺(みむら)、江崎 礼子、成澤漁業、宮本 栄子、富山教区災害復興支援ネットワーク、(有)谷駒、黒美人 張富晴、吉田 幸代、小島 真知子、大里 幸三、桑島 かおり、藤津 裕子、藤場 芳子、三池眞弓、チャリティーゴルフコンペ 代表荒川、並木会館ゴルフコンペ 代表霜 満、東弘寺、小島 康子、東京四組

* 複数回ご協力頂いた方も、記載は一回とさせていただきます

皆様の温かいご支援に心より感謝申し上げます。

尚、今後も東北被災地への支援活動・熊本地震支援を継続していきますので、引き続きお力添えをよろしくお願い申し上げます。

平成27年関東 東北豪雨

常総市 鬼怒川決壊

体験者の感話

東弘寺坊守の豊田宏子です。
私の寺は、常総市、旧石下町にあります。昨年九月の東北豪雨、鬼怒川決壊のまぎにその場所からすぐのところですよ。皆様からは大変心配いただき、またお昼舞い、ご支援をいただきました。本当にありがとうございます。心より御礼申し上げます。

当日は、前日から続く酷い雨で、夜中から避難を呼びかける防災無線の呼びかけ。私のところは明け方になってから避難指示が出ました。皆さん、お城に避難したり、親戚のところに行かれたり様々でしたが、私は住職と本堂にいれば大丈夫だろうと、もとよりどこに行くことは考えていませんでした。テレビで若宮戸地区の越水が報じられても、テレビの映像では大し

たことにも感じられず、お昼ご飯をいつものように作って食べていました。

しかしまもなく、三坂地区で鬼怒川が決壊したので避難するようにと防災無線で報じられると、「逃げなくちゃー」ととぞに思いました。しかし住職は俺は行かない。行くならお前一人で行けー」と言い、そんな問答のわずかな間に庫裏の東側の道路に水が押し寄せてきて、本当にあつという間に家から出られない状況になってしまいました。

テレビを見ると、決壊した水が濁流となって木や家を押流して押し寄せ、崩れかけた家の屋根の上で人が助けを求めているあの映像が映し出されていました。その中にガソリンスタンドを見つけてそこがどこであるのかすぐにわかりました。いつも給油している門徒さんのスタンドでした。周りには、それこそよく知っている方もお世話になっている方々の住んでいる家がたくさんありました。

愕然としているうちにテレビ

が消え、ヘリコプターの音がゴーゴーと鳴り響き、家の周りの様子はさながら映画の世界に入つたようでした。ヘリコプターに吊り上げられて救助されている姿が、家の中から、あちらにも、こちらにも、そこらにも見る事ができて、あの辺りは誰々さんの家だ！ あそこのおばあちゃんだろうか？ などと住職と話したりしていました。ヘリのけたたましい轟音とともに家のサツシが壊れ、そうになる位ガタガタ揺れて、水はヒタヒタと押し寄せてもつづくに玄関に入つてきそうでした。

その頃には停電してもうテレビを見る事ができなかったの、で情報もなく状況もわからず、不安というよりは爰にテンションが上がつて、あれもこれもと色々な物を二階に運んでいました。

ほんとにお前は欲深いな・・・と云っている住職も私につられて大事な物を二階に上げていました。私たち二人は、水が上がつてきても二階にいれば何とかなだろうと思つていましたから、家に留まつていました。

その頃、アピタやお城のある石下地区では、越水した水が濁流となつて川のように押し寄せ、避難所は次々に閉鎖となり、また三坂地区では、決壊した水が川となつて家や車を呑み込んで押し流し、濁流の中からみんな必死で逃げていたのです。ヘリコプターで救助された方が五千人、ボートで救助された方が一千人と聞いています。

みんな必死で夢中でした。まずは命を守るために、自分の命、そして家族の安全、近所の人、親戚の人を気遣いながらの数日間でした。

本当に、一人ひとりに物語があります。まるで映画のようで、本当にこれが現実なのだろうか、と疑いたくなるような、そういう現実が水の引いた私たちの町にはありました。どうでした！ 大変だったでしょう！」と聞くとうちは「メーター五十も水が来たよー」と、そんな答えが普通に返ってくる現実。家も、車も、お米も、農機具も、仕事も、みんななくなつてしまつた

現実。水もない、電気もない。
どこからどこまでしつちやかめ

つちやかの、泥だらけの家。途
方に暮れながら、夢中で泥掃除、
片づけ。

つば市のガソリンスタンド
に行った時、空気がきれいな
ので驚きました。臭いと埃でマス
クなしではいられなかったから。
帰り道、小貝川を越えると真っ
暗闇の私たちの町。信号もなく、
明かりのない暗い家々。本当に
ここに人々が暮らしているのだ
ろっか？と疑いたくなるほど、
ひっそりと冷たく暗い町でした。

何もない町。水も電気も、開
いているお店もなく、食べる物
も、着る物も、掃除道具も、寝
る場所さえない。川を渡れば、
隣の町に行けば、何でもあるの
に。どうしてここだけが、何も
なくなっちゃったんだろう？」
まさに被災の町でした。本当に
この現実が悲しかった。胸の中
に重たい石が入ってきて、どん
なことをしても取り除くことが
できなかった。

私の寺では開徒さんの本当に

多くの方々がこの水害で被災さ
れ、大変な思いをされました。

大変ですね！と声をかけると、
決まってみんな口々にみんな一
緒だから！と言いました。誰に
聞いてもです。私だけじゃない、
みんな一緒だから、がんばろうね、
がんばろうね」と手を握り合い、
肩を抱き合い、励ましあつて、自
分を奮い立たせて、どんな困難を
も必死で乗り越えてきた。家族が、
みんなが、一緒に住めるように元
の生活を取り戻す為に、必死で
過してきた。

失つてはじめてわかる何気な
い、当たり前の日々の大切さ。水
が出て、電気があつて、温かいこ
飯が食べられて、お風呂に入つて、
家族みんなが、一緒に寝られる家
があつて、仕事があつて、お隣さ
んがいて、友達がいておしゃべり
できる。何もかもが当たり前だつ
た元の生活を取り戻す為に、一生懸
命奔走した日々。

しかし、待っていたのは重たい
現実でした。みんな同じだか
ら！」の水害も、復興の仕方はそ
れぞれに違つて、元の生活を取り

戻せた人も、住み慣れた土地を離
れなければならなかった人もい
ます。日常を取り戻してみれば、
孤独、虚しさ、悔しさ、悲しみ、
そんな思いが胸をよぎる。

日常に戻った今、私たちが直面
していることは何でしょう。これ
は、心の居場所です。私の心をど
こに置くかです。水害の真つ只中、
真つ只中に思つたことは、命を守る
ということです。みんな口々に言
っていたことは、無事でよかつ
た！ということです。生きてい
くことは大変だけれど、みんな無
事でよかつた。私たちの心の奥底
の本当の願いというのは、特別の
ことではない。何が一番大事が
ます。命がある。変え合つて人
がいる。そして、居場所がある。
そのことが当たり前のことにな
かつた。尊いことだつたことに気
づかされた。水害を経験して、お
かげさまで、当たり前だと思つて
いたことの、一つ一つが実は有り
難いことだつたんだなあ、と感謝
することができた。

しかし、九ヶ月も経つて、今は
どうでしょう！すっかり当たり

前の生活に慣れて、感謝の気持
ちを忘れてしまつています。し
かし、私たちはいつでもまたそ
こに還ることが出来ます。何が
一番大切だつたか、当たり前前
のことがどれほど尊いことであ
つたかということに。それは私た
ちの宝物だと思います。

先日の坊守研修会で、お寺と
は、何のために生まれ、何をし
て生きるのかを学ぶところです、
と教えられてきました。それは
私たちの心の奥底の本当の願い
とは何なのかを教えられるとい
うことです。特別なことではな
くて、何が一番大切なのか、そ
して生きていく方向は大丈夫で
すか？ということを一緒に学
ぶ場だということです。

どうぞみなさん、お寺の聞法
会を嫌がらないで、就職、坊守
に誘われましたら、何卒、参加
下さい。

最後に皆様に感謝申し上げます。
して、感話と致します。ありが
とうございました。

(この感話は、2016年秋、福間大寺
での感話を基にしたものです)

平成27年関東東北豪雨

常総市の現在

平成27年関東東北豪雨が、茨城県常総市を襲ってからもうすぐ二年。常総市は、以前のような雰囲気を取り戻しつつあります。

私たちは同年9月から11月にかけて、炊き出し・物資支援などの活動が続けてまいりました。

そして2016年6月、水害より8か月たった常総市の現状を訪ねて回り、住む人々に改めて話を伺いましたが、まだ被害が消えたとはとても言えない状況がわかってきました。

早い人は去年の11月には家を修理して入居できた。でも手間取ってしまった人は、いま現在家を建てている人もいるし、中には事情があつて避難している公務員住宅からまだ出られない人たちもいる」

去年から、小さな虫や雀が大量発生して非常に困っている。特に貝は浄化槽の中のバクテリアを食べてしまうので、汚物が分解されず、悪臭が立ち込めてしまう」

コメ作りの機械は全部だめ。一応収穫したが、コメを乾燥させる



機械も壊れたから、カントリーエレベーターに全部頼むしかなかった。汚水に浸かったコメは出荷できないけど、応対し取らないと後に差支える」

被災した町は消えつつあるけれど、被災した人は今現存もそこに生きている。



写真による比較（左が2015年10月、右が2016年6月）

後編に続きます

前編《本誌》

- 宮城県石巻市座談会 前編
- 福島県の汚染とその現実 前編
- 収支報告 会員紹介
- 常総市水害 体験者の感話
- 常総市の現在

後編《2017年1月発行》

- 宮城県石巻市座談会 後編
- 福島県の汚染とその現実 後編
- 熊本における活動報告
- 編集後記

常総市の人々と直接語り合い、率直に感じた一言が、これでした。

私たちは被災した人がいる限り、そのひととひとをつなぐ活動をこれからも続けていこうと思っています。